

世田谷パブリックシアター

三軒茶屋発、地域の劇場による活動紹介冊子 [キャロマグ]

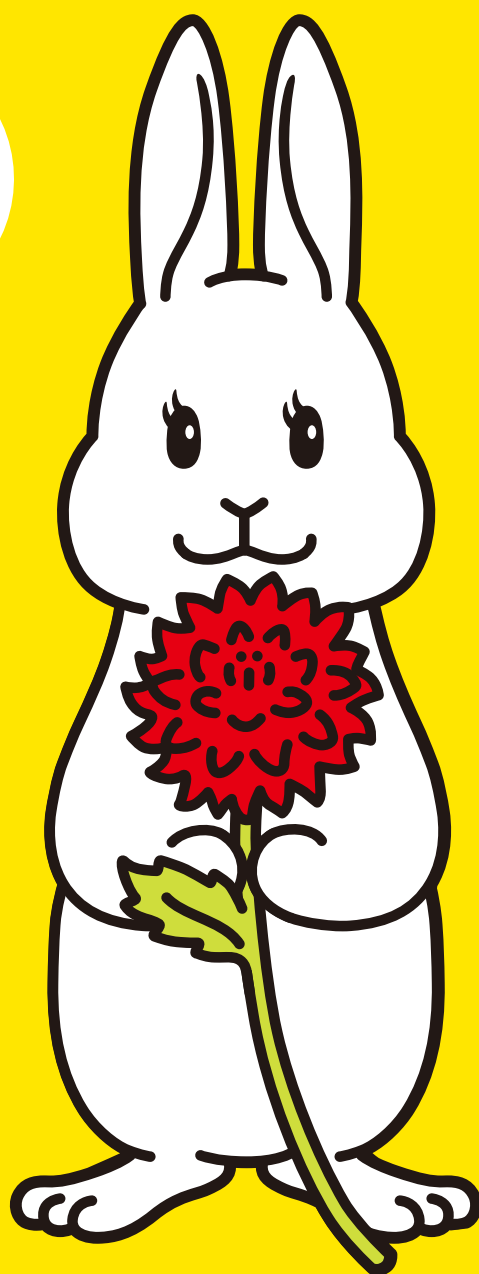
Vol.9

Jul.2016

2016年7月号

CarroMag.

あっちはこっち
こっちはあっち



ワークショップ・レポート
「地域の物語」2014-2015
介助・介護を考える

三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」（600席）と「シアタートラム」（200席）という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、その活動は劇場での上演活動に留まりません。3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。キャロマガ（CarroMag.）は、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

（ Back Number ） バックナンバー



Vol.1 2013年3月号
ワークショップ・レポート
「地域の物語」2011-2012
1960年代の世田谷



Vol.2 2013年4月号
ワークショップ・レポート
高校生のための
演劇ワークショップ'12



Vol.3 2013年11月号
ワークショップ・公演レポート
ユース・パフォーマンス2013
トバズニハ『コンパス グルグル』



Vol.4 2014年2月号
レクチャーレポート2013
舞台芸術のクリティック



Vol.5 2015年1月号
ワークショップ・レポート
世田谷のこえ アーカイブ
プロジェクト2012-14
世田谷で暮らす——
移り住むこと、移り住むひと



Vol.6 2015年2月号
ワークショップ・レポート
世田谷パブリックシアター
演劇部 中学生の部



Vol.7 2015年3月号
ワークショップ・レポート
かなりゴキゲンな
ワークショップ巡回団
学芸会編



Vol.8 2016年2月号
ワークショップ・レポート
かなりゴキゲンな
ワークショップ巡回団
特別支援学級(通級)編

CONTENTS

はじめに	
地域の物語とは？	02

「地域の物語」2014-2015 ワークショップ

劇場スタッフレポート	
終わってみるまで分からない物語	恵志美奈子 04
進行役レポート1	
作家が不在である発表公演の舞台裏	山田珠実 06
進行役レポート2	
「地域の物語」をめぐる3つのこと	花崎攝 09
ワークショップのプロセス(2014/2015年)	12
座談会	
自分の中からうまれる演劇	16
コラム	
あなたへの物見遊山	小川智紀 18
コラム	
すばらしい“普通”のみんな	今村舞 20

世田谷パブリックシアター演劇部 批評課

進行役レポート	
「地域の物語」への中学生からの返歌	藤原ちから 22
座談会	
中学生が見た「地域の物語」	24

地域の物語アーカイブプロジェクト 2014-2015

インターンレポート	
聞き書きで深まる物語、続く関係性	今村舞 26

「地域の物語」関連プログラムの詳細 30

CarroMag. Information	
学芸からのお知らせ	36
学芸スタッフから	
おまけマンガ『たまにはこんな役 #9』	
編集後記	

地域の物語とは？

集団創造におけるメソッドを探る試み

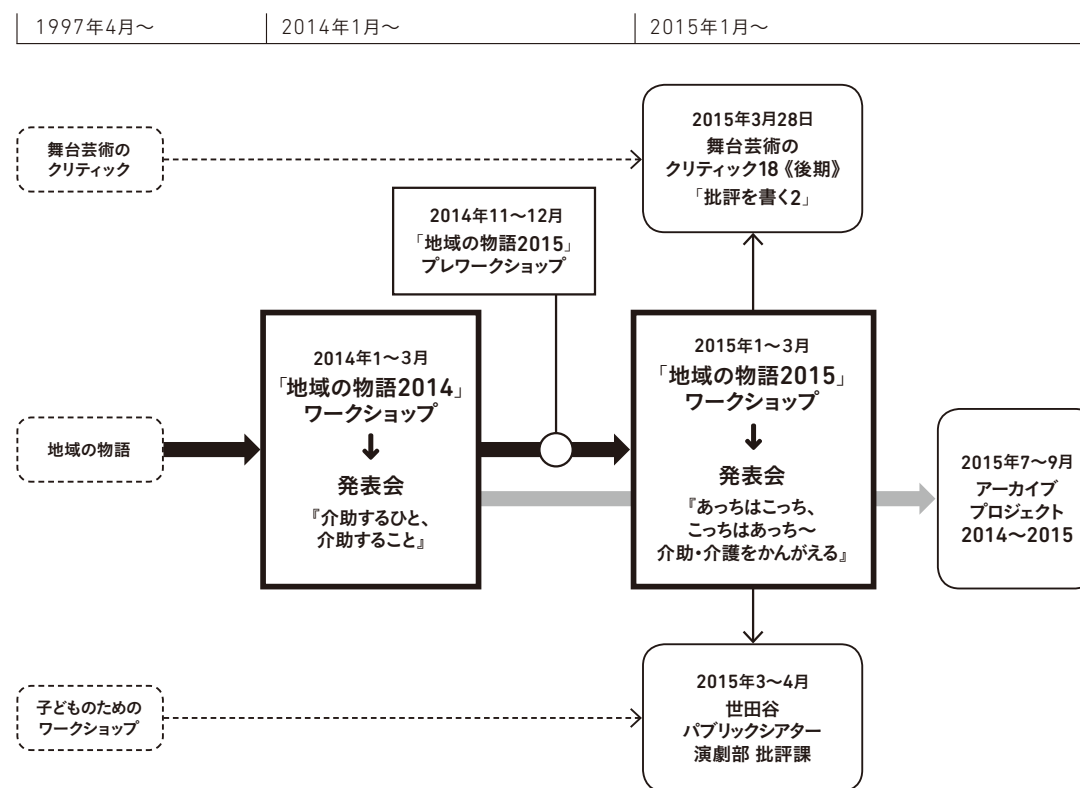
世田谷パブリックシアターが実施しているワークショップ「地域の物語」は、公募で集まった一般の人々が、数ヶ月にわたるワークショップのプロセスを通じてグループで対話しながら考えを深め、そこで出てきたアイデア、誰かに伝えたいと思ったことを、シアタートラムで演劇のかたちで発表するという事業だ。今号のキャロマグで紹介するのは、2014年～2015年の「地域の物語」だが、右ページの図を見ていただくとわかるように、「地域の物語」はワークショップとその発表会だけでなく、違うかたちでプロジェクトが展開したり、別の事業と連携したりしている。

そのあゆみを簡単に振り返る。そもそもこの2年間の「地域の物語」では、進行役は花崎攝さんと山田珠実さん、コースは1つ、「介助・介護」を2年連続テーマにする、ということだけが決まっていたが、1年目が終わった時に、2年目の1月～3月までの長期間のワークショップの前に短期間のワークショップを行えば、初めての方も気軽に来やすいだろうし、ゆっくりとテーマを深めることができるのではないかと11月～12月に「プレワークショップ」を行うことにした。

2年目が終わった時には、ワークショップにおける発見の多くが、尺の決まっている発表作品に入れることができず残念に思い、紙というかたちで記録する可能性を探るため、7月から「アーカイブプロジェクト」を立ち上げることにした。また劇場では、子どもに向けたワークショップやレクチャーなど、年間を通じて実施しているが、それらいくつかの事業から「地域の物語」と連携したいという話が出てきた。こうした提案が生まれるのは、進行役、講師とスタッフが常々、劇場全体の取り組みの中で各事業を位置づけるような話し合いを継続しているからでもある。また、「地域の物語」の過去の参加者たちの同窓会といった集まりも、年度を超えたつながりの中で継続している。そうした緩やかな人のつながりや取り組みから思考し、自然発生的にプロジェクトが広がっているのが「地域の物語」なのである。

さて、「地域の物語」は世田谷パブリックシアターが開館した1997年から実施されていて、20年近くの歴史がある。20年といえば、生まれた子どもが成人式を迎える年月だ。その間には「地域の物語」の担当者が替わり、学芸グループのメンバーが

地域の物語 2年間のあゆみ



替わり（開館当初のメンバーは誰もいない）、進行役が替わり、数多くの参加者たちが入れ替わりやってきた。社会状況も変わった。

一体、何をもって「地域の物語」が継続しているといえるのか、そもそも「今の地域の物語」と「昔の地域の物語」のどこが同じで、どこが違うのかを検証するのは難しい。しかし人が替わっても、核といえる何かが引き継がれてはいる。その核を「地域の物語」の20年間を想像し、私の勝手な視点から語るとすれば、「地域の物語」は、「グループの言葉」を、演劇という思考方法や表現方法を使ってかたちにしようとする、集団創造を目指したプロジェクトであろうとしてきたということだ（それが常に関係者にそういう言葉で意識されていたかはともかく）。

ここでいうグループの言葉には、2つの側面がある。まず、1つのかたちに集約しない、差異に価値を置く多様性とも言い換えられる言葉と、合議の末にとりまとめられた言葉だ。プロジェクトの時々の関係者たち（進行役、スタッフ、参加者）は、その2つを念頭に置きながら、これらをどのようにかたちにしていくか、どのように集団創造を進めるか挑戦してきた。理想の（もしくは踏襲すべき）作業プロセスや、アウトプットのかたちがあるのではなく、あるのは取り組みの姿勢だけだ。つまり「地域の物語」は、活動し続ける行為そのものを指すともいえるだろう。■【恵志美奈子】

劇場スタッフレポート

終わってみるまで
分からない物語

恵志美奈子 (世田谷パブリックシアター)

えし・みなこ／劇場部学芸で、コミュニティプログラム、人材育成事業などの企画運営を行う。これまでの主な担当に、東南アジアとの演劇プロジェクト(2001～2007)、「パブリックシアターのためのアーツマネジメント研修」(2007～2010)など。「地域の物語」は、2012年度から担当。

「地域の物語」の2014年～2015年は、ワークショップのテーマを進行役と劇場スタッフで「介助・介護を考える」と事前に決めて参加者を募集した(テーマ設定の背景にある世田谷区の特色は、p.9～p.11の花崎攝さんの文章に詳しい)。具体的なテーマを決めないことを重視した年もあるが、参加者全員でテーマ＝共通する関心を見つけるところからワークショップを始めると、話し合いに時間がかかりすぎ、実際に身体を動かす時間が限られてしまう。当然、終わったときに「もう少し時間があれば……」という意見が、参加者からも進行役からもスタッフからも出る。とはいえワークショップの回数を増やしても、参加者への負担を増やすだけで解決策にはならないし、初めて参加したいと思う人には敷居が高くなる。

そのため今回は、事前に具体的なテーマを設定するだけでなく、参加対象も限定することで、時間の不足感を補えないか試してみることにした。テーマの具体性が増すことで、近い関心を持つ人が集い、話し合いも深めやすくなるように思え、発表会にも参加者の友人や家族だけでなく、そのテーマに関心のある人が足を運び、そこにある種のコミュニティが構築されや

すくなるのではないかと思えた。さらに、テーマを2年とも同じにすることにした。前年の参加者がリピーターとして2年目も参加してくれる、ワークショップを形成するグループのダイナミズムが変わってくるはずだと思ったからだ。こうして1年目(2014年)は、「介助をしている人、介助について学んでいる人、介助に携わったことのある人」を、2年目(2015年)は、「介助・介護やケアの経験のある人、考えたい人」を対象として募集した。

1年目。進行役と劇場スタッフには、「介助」という言葉にこだわりがあった。ケアされる側(当事者)の意思に基づく「介助」と、ケアする側の判断で必要に応じて行う「介護」とを区別した上で、当事者主体の「介助」という考え方が、今の社会における人と人とのつながりや距離感を問い直すだけでなく、健常者(マジョリティ)中心文化に新しい視点を投げかけるような気がしていたからである。

しかし、脳性麻痺の方たちの自立生活運動に基づくこの「介助」の考え方はまだ一般的ではなく、こちらの思い入れとは異なり、「介助」「介護」の差異はほとんど認識されていなかった。

た。そのため2年目は、定義にはこだわらずに「介護」という言葉も取り入れた。

こうしてテーマや対象を具体的にしてみても、「いま、ここ」に集まった参加者たちのグループで何が起るのか、互いに何を共有し、何を発見していくかは事前には分からない。グループの方向性は、誰かがあるタイミングで何かを言うといった、ちょっとしたことで変わっていったりする。その「最後の最後になるまで分からない」状態全てを引き受けながら、全員で「いま、ここ」にいる自分たちの言葉／考えをまとめ、誰かに伝えたいことを表現として紡いでいくのが「地域の物語」である。

また、それを行うグループが、市井の人々であることにも「地域の物語」の特色がある。それまで演劇をやってきたことのない人たちが、グループで身体や言葉を使って自然と作業する状態を生み出すために、進行役は苦心する(そのプロセスについては、p.6～p.8の山田珠実さんの文章に詳しい)。

いずれにしても、参加者をかなり限定した企画で、参加者が集まるのか心配したが、どちらの年も定員を超える応募があった。

「地域の物語」では、ワークショップでの発見や成果をシアタートラムで発表する。その年の進行役によって、発表作品のまとめ方は異なるが、基本的にワークショップ中に参加者たちが出したアイデアや意見、グループ作業の成果がベースになる。この2年間では、参加者同士の聞き書き(インタビューをし合って書きおこすこと)や、グループ作業で出てきた表現や意見、ワークショップ風景そのままを発表作品に活かすかたちを目指した。具体的には、参加者から出された全ての要素を並べて共通するトピックやテーマを見つけ、それに基づいてシーンを選び、順番(構成)を決め、参加者自身がシーンごとに作業を進め、言葉を深めていくかたちを取った。最終的に、15シーンほどで構成

されたが、1年目が終わり、2年目に向けて進行役と劇場スタッフで話し合ったとき、「今年の作品はモノログが多かった」という感想が出た。参加者が互いを知り、各々が日々感じていることを話したり、聞いたりする状況に至るまでに多くの時間を積み上げ、ワークショップでは参加者ひとり一人のエピソードを共有することが中心になり、発表でも各人が舞台に立って語るというモノログが多かったのだ。そこで、2年目の目標は「モノログからダイアログへ」と設定された。

2年目にも参加した1年目からのリピーターは、約半数だった。2年目は、このリピーターたちが1年目のことを踏まえながら取り組みたいことを提案してくれた。それに引っぱられて、新しい参加者たちもグループの中で積極的に意見を交換していった。相手に質問し、感想を述べ、グループ作業を行なっていく。世の中をどのような視点で見ていくかを、誰か特定の人のアイデアではなく、複数の視点から見つけ出し、それをグループで共有し、また別の視点で改めて見るということを繰り返しながら、発表する作品の形を複数で探っていくことが、より深く実践されることとなった。

こうしてつくりあげられた2年目の発表『あっちはこっち、こっちはあっち』は、参加者ひとり一人の思いや考えが互いに呼応し合う、対話の場からつくられたダイアログ主体の作品となった。2年間同じテーマを設定することで、時間の制限を少しは乗り越えることができた。また、最終日の発表会に来て下さった観客の方たちも、当事者意識をもちながらその場に居合わせてくれ、作品発表後に設けられたトークセッションでは、意見がさまざまに飛び交った。限られた時間ではあったが、観客と参加者のダイアログも一部ながら実現できたといえる。

■

進行役レポート 1

作家が不在である
発表公演の舞台裏

山田珠実（振付家・ダンサー）

やまだ・たまみ／劇場、公共施設におけるダンスワークショップや、誰もが参加できるダンス作品の創作を主な仕事としている。主な作品に『蜜の年月』『みつつのうたプロジェクト』『羊三十三夜』や高齢者に聞き取り取材する「わたしの道」プロジェクトなど。ジャンルを超えた活動も多く行う。名古屋大学、愛知淑徳大学、名古屋学芸大学非常勤講師。

振付家という肩書きで仕事を始めて15年になる。さまざまな地域で、一般の人達と舞台作品を上演する企画に関わってきた。世田谷パブリックシアターでは、この2年「地域の物語」に進行役として参加しているが、際立ってユニークな企画だと感じている。一体、何がそんなにユニークなのか？ 私の視点で3つに絞り、以下に整理してみる。

その1 ミーティングの時間の長さ

まず、はっきりと特異な点は、パブリックシアターの学芸スタッフと進行役のミーティング時間の長さだ。ワークショップ開始前に2時間、終了後に2〜3時間。これに加え、前日や翌日に集まることも多い。実際にワークショップをしている時間より圧倒的に長い。

ミーティングの多くは雑談から始まる。最近ハッとしたこと、考えていること、腹が立ったこと、などなど。私はこの雑談をしながら頭を「地域の物語」のモードに切り替える。それから、たとえば募集前の段階であれば、テーマをどうするか？（この2年については「介助と介護」）そのテーマをどのように絞り込み、どんなタイトルをつけるか？ どんな人に参加を呼

びかけたいのか？ 募集のためのリード文をどうするか？ 企画を立てる段階から進行役も一緒に考え、話し合う。

各回に行なうワークショップの内容自体もこの2年間については、進行役の花崎攝さん、私、パブリックシアターの学芸スタッフ 恵志さんの3人を中心に、アシスタント（2014年／福原忠彦さん、2015年／山本雅幸さん）、参加可能な学芸スタッフも加わり、誰もがアイデアを出しながら組み立てる。新しいワークショップのアイデアについては、実際にその場で試してみる。介護や介助にまつわる個人的な体験や考え方もスタッフ間で交換しながら視界を広げ、内輪でプレワークショップを行っているような状況が生まれる。

ワークショップの後にも振り返りのミーティングを行う。ワークショップ中、それぞれのスタッフが目撃したこと、感じていたことなどを交換する。スタッフ間で、全く異なる視点や考え方を持っていることに気がつく時もあり、議論を重ねて理解を深める場面もある。その過程は次回のワークショップに活かされる。

時間を気にせず、それぞれの立場を取り立てて意識することなく、互いに遠慮なく、長々と

話し続けている状況にしばしば驚く。このようなミーティングが続けられるのも、各自が（仕事であることも忘れるくらいの）深い興味を持って企画に取り組んでいるからだと思う。幸福な現場だ。

パブリックシアターが関わるワークショップの現場は、年間400回前後らしい。学芸スタッフの日常の主な仕事は、それらをサポートし、観察し、必要に応じ、ワークショップの進行役にフィードバックすることだ。学芸スタッフの経験値はワークショップをプランする段階でも効力を発揮する。何が有効で何が有効でないかの判断は私よりも的確だ。そして、対等に話しつつも、学芸スタッフの恵志さんには企画の最終的な責任を担っているという自覚が強くあるのを感じる。依頼を受けた私は、自由な気持ちで自分の責任だと思うところに集中し、最善をつくすことができる。このことは「地域の物語」を支える重要な鍵のひとつだと思う。

その2 進行役なのに、参加者でもある

進行役として具体的に依頼された仕事は、ワークショップを進行し、その過程で得た知見や発見、考え事をまとめ、発表公演まで持っていくことだった。そして、その仕事を果たすために、私がこれまでになく考えさせられたのは、どうしたら公募で集まる参加者とフラットな地平に立てるか？ ということだった。「進行する以上、フラットな地平になんか立てない」というのは道理だ。むしろ、そう言い切る方が公平だとも思う。が、この「地域の物語」に関しては、そう言い切ってしまうことにも矛盾がある。募集チラシに明記してある通り、ワークショップは一緒に考える場であり、公演はワークショップでの発見を発表する場である。「地域の物語」はいわゆる演劇のワークショップではなく、演劇の手法を使って一緒に考えることを中心とする企画なのだ。だとしたら、進行役も参加者と同様、個人として自分の考えを開示し

てよいのではないか？ だって一緒に考えましようとして提案している側の人、自分は蚊帳の外にいるなんて、変じゃないか？

このような理由で、進行役も学芸スタッフも専門性と役割に対する責任を持ちながら、参加者のひとりでもあることを伝え、参加者に承認してもらうところからワークショップはスタートした。実際にグループワークに加わることもあれば、個人的な発言もし、参加者同様にふるまうことも多くあった。矛盾を孕みつつも、そのことが可能だったのは、進行役が2人にアシスタント1人という3人の体制に加え、学芸スタッフからも安定したバックアップが得られたからだと思う。

その3 作家が不在である発表公演

「地域の物語」発表公演には、脚本、構成、演出、振付のクレジットが一切ない。それは、とても特異な点だと思う。しかし実際の舞台は、まとまりがないなりに、ある程度、見応えのあるものになっていると思う。それはどのように実現されているのか？ 順を追って整理してみる。

ワークショップ前半

最終発表をどのような舞台にするか？ という視点は、初めから頭の片隅にはある。ワークショップ中、面白い考え事や発見があれば、その日の振り返りのミーティングでは、その内容を舞台に乗せるための具体的な方法について言及することもある。一緒に考えるという「地域の物語」の本質を発表公演で実現するためには、ひとつ一つの考え事が観客に主体的に受け取られるよう工夫する必要がある。その工夫の仕方を検討する。ワークショップ中、進行役は参加者のひとりでもあるが、ワークショップ後の振り返りでは、観客の視点にも立って状況を俯瞰するということを繰り返す。

ワークショップなかば

全日程を折り返すころには、ワークショップ中に参加者たちがつくったテキストやシーンが数多く集まっている。花崎さん、私、学芸スタッフの恵志さんの間で、共通するテーマが検討され、何を舞台に乗せるかが再考される。

その後、発表公演の具体的な構成案をつくる。誰がどのシーンに参加するか、シーンをどの順番で並べるか、舞台空間の扱い方をどうするかなど。花崎さんと私を中心に、アシスタント、恵志さんと他の学芸スタッフも加わりながら、延々とミーティングを行う。そのミーティングの場にはワークショップの参加者が不在だ。彼らの不在を意識しつつ、参加者と公演の観客も含む全体にとって何が必然であるか、私たちがなかに奮闘して考える。ひょっとしたらその発想自体が思い上がりを孕んでいるかもしれない。全体にとっての必然と言いながら、その実、それぞれ自分の趣味趣向に引き寄せて解釈しているに過ぎないかもしれない。それらの矛盾や疑いを念頭に置きつつ議論し、構成案を立ち上げる。

ワークショップ後半

とりあえずの構成案を参加者に問い合わせ、意見を募りながら、調整していく。もともと全ての内容は、参加者自身が書いたこと、発言したこと、行なったことから拾い集めたものだ。しかし、その時のワークショップの流れから独立し、舞台で再現するとなると、手直しが必要なものがほとんどである。改めてテキストを整理したり、もともとのアイデアをさらに発展させシーンにしたり、書かれたテキストを台詞として覚えたり、膨大な作業が必要になる。それらの作業をできるだけ参加者に委ね、分担を決める。シーンとシーンの繋ぎ方、音楽をどうするか、演じたり歌ったり踊ったりの演出など、専門性が必要な要素については、劇場付きの技術スタッフの助けも借りながら、撮さんと私と

で考える。その意味では、全体の構成や演出について進行役は多くを担っている。ただ撮さんも私も、「地域の物語」ではワークショップという現場での発見をできるだけ粉飾なく、活きのよいまま舞台に再現することがもっとも重要であり、最善なのだと確信している。したがって、構成も演出も観客への橋渡しとして最低限必要なことで考える。

ここまでにも何度か書いた通り、「地域の物語」は一緒に考えるという試みであるが、同時に、特定の個人によることなく集団で舞台をつくるというチャレンジでもある。どちらも決して簡単なことではない。実際に多くの矛盾を孕んでいると思う。

しかし、それは豊かなことだ。矛盾を抱えつつ、やりくりし、その都度バランスを探り当てること。それこそ、考えるという行為に近いのではないか？ 私たちは多くの場面で、白と黒とを分けたがり、正解不正解を知りたがる。視点が変わればひっくり返る価値観を頼りに、取りあえずの答えを出す。その必要に日々せまられている。取りあえずの答えによって開かれる次への扉はあるだろう。でもひょっとしたら、その判断によって見えなくなった小さな部屋もあるだろう。

ワークショップを進行しながら、発表公演の構成案を組み立てながら、繰り返し、迷い、立ち止まらされた。その中で私自身が深く学んだことは、矛盾を抱えていられることの価値、答えに飛びつかず、問いを問いのまま、疑いを疑いのまま、抱えていられることの価値だ。

「地域の物語」に進行役として関われたことに深い感謝を感じている。■

進行役レポート 2

「地域の物語」をめぐる
3つのこと

花崎 撮（シアタープラクティショナー）

「地域の物語」が重ねてきた時間

「介助・介護」というワークショップのテーマは、「地域の物語」という企画が重ねてきた時間、つまり世田谷パブリックシアター学芸セクションが、さらに世田谷という地域が、積み重ねてきた時間を踏まえている。「介助・介護」というテーマは、日本の総人口に占める65歳以上の割合（高齢化率）が25.1%（2013年）に達し、紛れもない高齢化社会に突入している現在、タイムリーなテーマともいえるだろう。しかし、このテーマの発想のもとには、むしろ、この世田谷という地域で障害者が切り開いてきた「介助」の思想と実践の蓄積がある。

世田谷には身体障害者のための日本最古の教育機関、東京都立光明特別支援学校があり、多くの障害者とその家族が移り住んできた。脳性マヒ者を中心とする障害者も、区民として「福祉のまちづくり」に参加し、推進してきた先進的な地域だ。障害があっても、自らの意志によって、介助者を入れながら地域で生活を成り立たせる「自立生活運動」も盛んだ。当事者主体の「自立生活」を営むために、「介助」をどう生活に組み込むか、介助者どう付き合うか、

はなさき・せつ／劇団黒テントを経て、公演活動とともに、特に障害者や女性、子どもなどとのワークショップを多数行う。舞台作品（構成・演出・出演）に『女/鬼 女たちのコラージュ』（コロンビア国際女性演劇祭招へい作品）など。海外での活動も多い。武蔵野美術大学、日本大学芸術学部演劇学科非常勤講師。

考えながらの絶え間ない実践が重ねられてきた。劇場にも車いすライダーが、観客としてだけでなくワークショップの参加者として、あるときはゲストとして登場することもそう珍しくない。

1年目は、こうした世田谷の地域性とネットワークを活かして、介助者（ヘルパー）として、障害者運動にかかわってきた菅原和之さんや、実際に「自立生活」を営んでいる障害当事者の上田要さん、辻安光さん、矢崎与志子さんたちをお招きして、お話を聞くことから企画をスタートさせた。「自立生活」を支える当事者主体の「介助」についての考え方とその具体的な在り方を、このワークショップの参照項――参加者が自らの介助・介護の経験を改めて考える手がかりとして紹介したかったのだ。たとえば、介助・介護「される人」、「する人」の尊厳や関係性をどう考えるか？

その参照項が制約になった部分もあるかもしれないが、彼らと会ったことがきっかけとなって、「自立」とはなにか？ と考えたり、話し合いのなかから『『自立』より『共立』』という言葉が飛び出したり、関連して「自由」ってどういうことだろうと考えたりした。

グループで作業することの意味

特に2年目になって、参加者の経験を聞き、テキストに整え、それをシーンに起こす過程で、グループ作業本来のダイナミズムが発揮され、さまざまな発見や展開があった。

2年目のワークショップは、2人組で互いの経験を聞き書きすることから始めた。次に、聞き書きの中からいくつかを選択し、それぞれのグループを形成。各グループで、聞き書きした出来事を演劇のシーンに起こすために、登場する人物やそのときの状況について、本人に改めて詳しく話を聞いた。それは、ある経験を理解するために状況を分析していく過程となった。意見交換をしながら作業を進める中で、本人は忘れていたことを思い出したり、見落としていたことに気がついたり、自分と視点のちがうコメントに驚いたりする。そうして、出来事の輪郭や意味がよりはっきりしてきた場合もあれば、それまでと全く違う視点で、自分に起こったことを再考し始める人も出てきた。さらに、何を伝えたいのか、どう伝えるのか、グループで話し合いと試行が重ねられた。たとえば、どのようなスタイルのシーンにするのか、本人が本人

を「演じる」のか、他のメンバーが「本人役」を演じるのかなど、一つ一つ具体化していった。

そうこうしているうちに、あっという間に発表会当日を迎えた。とてもありがたいことに、観客のみなさんが、熱心に集中して観てくださったお陰で、発表公演は曲がりなりにも演劇として成立することができた。参加者、スタッフの得たものも大きかった。特に、ある参加者は、たとえ個人的には否定的な経験であっても、演劇にして届けることで、観客にさまざまな感情や思考を呼び起こしうることを肌で感じて、驚いたという。言い換えれば、個人の経験が、表現することで、より拓かれた新たな意味を獲得しうると感じたのだ。そのことが、本人を励まし、観客をも励まし得るとしたら、この企画も捨てたものではない。

タイトルをめぐって

1年目は『介助するひと、介助すること』という企画タイトルをそのまま発表公演のタイトルにしたのだが、2年目になって、発表公演に別のタイトルをつけてはどうかという話になった。スタッフ内で協議して参加者に提案したのが『あっちはこっち こっちはあっち』だった。



はじめは、「距離と境界線」という言葉が浮かんでいた。その辺りのことは2年目の当日パンフレットでも触れられているが、介助・介護にまつわるテーマを「受ける側」と「提供する側」の距離の取り方やその感じ方、また両者の間に引かれる境界線、などから捉えていたからだ。そして、その「受ける側」を「あっち」、「提供する側」を「こっち」とすることで、介助・介護というもっとも人間的な営みにかかわる両方の存在を、身近な言葉で、よりはっきり示すこととなった。さらに「あっちはこっち こっちはあっち」とすることで、その関係性——「提供する側」と「受ける側」の立場が容易には交換不可能である一方、「提供する側」もいつなんどき「受ける側」になるかもしれない可能性にも言及することができた。

参加者もスタッフも、ほぼ全員いわゆる「健常者」だったため、「健常者」のみで、つまり「提供する側」だけで、介助、介護について語ることに危惧があった。一方的にならないように、その場にいない人（「受ける側」）に少しでも思いを馳せられるどうか、そして、自分もいつ介助、介護が必要になるかもしれない脆弱な存在であると意識しておけるかどうかは、タイ

トルを考える上でのみならず、ワークショップ全体を通じて、大切なポイントだったと考えている。個人的には、「此岸と彼岸」、「金持ちと貧乏人」、あるいは「外国人と日本人」など、さまざまなことを重ねてイメージできるこのタイトルがかなり気に入っている。そして、なにより参加者もとても気に入ってくれたことが、うれしかった。

2年間、参加者の極めて個人的な経験の掛け替えのなさを痛感し、さまざまな場面での葛藤や矛盾におののき、そこに浮かび上がる複雑な感情にたじろぎながら、参加者と作業を重ねた。安易な価値判断をできるだけ配して、個々の経験に基づくグループ作業による発見や展開などを、発表を見にきてくれる観客にどのように届けられるのか、スタッフ一同、限られた時間の中で、ギリギリ至りつけるラインを探った。充分とはいえないまでも、個人の才能や力量を超えて、チームで作業することで、そして能動的な参加者を得ることで、はじめて実現できている作業だ。■

ワークショップのプロセス(2014年)

① 1月12日・日

自己紹介／菅原さんのお話①

名前を覚えるゲーム。「人間地図」。自分のお気に入りの「もの」について五行詩*を書く。世田谷で長く介助の仕事をしている菅原和之さんのお話を聞く。

*五行詩…即興的にある物事について5行で書いたもの。

② 1月13日・月/祝

他己紹介／菅原さんのお話②

二人組になって、紙を見ないでお互いの似顔絵を描き、インタビュー。相手をみんなに紹介する。前日に引き続き、菅原さんから「介助」と「介護」についてのお話。ワークショップの感想を五行詩で書く。



③ 1月18日・土

静止画をつくってみる

からだをほぐす。二人組になり、一人が目を瞑り、もう一人が導くブラインドワーク。3グループに分かれて、「介助・介護ではとした瞬間」の静止画を話し合いながら身体でつくる。

④ 1月26日・日

「介助・介護」をテーマにしたインタビュー

障害当事者の上田要さん、矢崎与志子さん、辻安光さんにインタビュー。インタビューの内容を模造紙にまとめる。感想の五行詩を書く。

⑤ 2月1日・土

身体のワーク

インタビューの内容を各グループで振り返り、ほかのグループに紹介するやり方を考え、発表する。プチ古武術。二人組で赤い糸のはしとはしを持ち、ピンと張ったまま自由に動いていくワーク。

⑥ 2月2日・日

「自由」と「自立」

「自由」と「自立」についてグループで考えて発表。

【宿題】伝えたいこと、舞台にのせたいことを次回までに考えて3分で発表。

⑦ 2月9日・日

宿題の発表

3分でプレゼンするはずが大作続きに。詩の朗読や漫談、ダンス、聞き書きなど色々なスタイル。

⑧ 2月15日・土

発表に向けたグループ作業①

3グループに分かれて、調べてみたいテーマを決める。「性の問題」「介助する人とされる人の気持ちの距離」「介助する人とされる人の間に生じるさまざまなズレ」について掘り下げる。石ヶ森光政さんを招いてヴォイストレーニング。五行詩を書く。終了後、懇親会。



⑨ 3月1日・土

発表に向けたグループ作業②

前回と同じ3グループに分かれて、もっと調べてみたいテーマを決める。「性の問題」を考えるグループは「ホワイトハンズ」代表の坂爪真吾さんに電話取材。ほかの2グループはディスカッション。発表。二人組になって、詩「山のあなた」を交互に朗読。

⑩ 3月2日・日

発表に向けたグループ作業③

発表の構成を進行役より提案。各シーンの内容をグループで話し合い。テキストをつくったり、即興で演じてみる。



⑪ 3月8日・土

発表に向けたグループ作業④

各シーンをそれぞれのグループに分かれてつくる。終了後に懇親会。

⑫ 3月9日・日

初めての通し稽古

構成とキャストを確認。8グループに分かれて相談しながらシーンをつくり、通してみる。

⑬ 3月15日・土

シーン別の練習／通し稽古

シーン別に練習。全部通す。技術スタッフに見てもらう。

⑭ 3月16日・日

繰り返し練習

どんどん練習、全部通す。技術スタッフに見てもらう。



⑮ 3月21日・金/祝

リハーサル

テクニカルリハーサル。はじめて舞台上で練習。

⑯ 3月22日・土

本番!(1回目)

午前、ドレスリハーサル。午後、本番。

⑰ 3月23日・日

本番!(2回目)

終了後に打ち上げ。

ワークショップのプロセス(2015年)

① 1月11日・日

初めての聞き書き

2人組になり、「今までの介助・介護で最もきつかったこと／よかったこと」について聞き合い、書き起こす。



② 1月12日・月/祝

自分のトピックスを見つける

1回目に自分が書いた「聞き書き」を声に出して読む。気になった「聞き書き」を選び、グループでディスカッションし、気になるフレーズをマッピング。「自分のトピックス」(気になること)を決める。

【宿題】「自分のトピックス」から調べ物をする。

③ 1月24日・土

グループごとに演劇をつくる

宿題で調べてきたことをグループでシェア。「介助する側される側の気持ち」「死に際」「人の本質」「コミュニケーション」についてグループごとに話し合って演劇をつくってみる。発表。

④ 1月31日・土

5秒演劇をやってみる

2人組になって、毛糸のはしとはしを持って目をつぶって歩いたり、抽象的な言葉を身体で表現する。1回目を書いた聞き書きから、気になるシーンを5秒演劇に。発表。

⑤ 2月7日・土

5秒演劇を再びやってみる

自分の気持ちをYesとNoの間のグラデーションで見せるゲーム「スペクトラム」をやる。お題は「臓器移植はありだと思う」「私の命は私のものだ」「私は自分の死を穏やかに迎えたい」など。前回に引き続き、1回目の「聞き書き」から気になるシーンを5秒演劇に。



⑥ 2月8日・日

自分たちの関心テーマを深める

2人1組になり、もっとやりたいこと、演劇にしてみたいこと、考えてみたいこと、印象に残っていることを聞き合う。興味ごとのグループで、演劇をつくってみて発表。

【宿題】舞台上で伝えたいことを考えてきて、思い思いのスタイルで発表する。

⑦ 2月21日・土

宿題の発表

宿題の発表。詩を朗読したり、人形劇をしたり、歌ったり、踊ったり、個性あふれる多くの発表が！「ともの歌」「家族と介護をめぐるモノローグ」「僕が見たデイケアの現場」「介助の仕事～エビチリ編」「ある家族の話」の種がでてる。本番で伝えたいことを確認し合う。



⑧ 2月28日・土

なんちゃってディベート

お題は「ポテチを食べる行為には指を舐めることも含まれるか」「親の介護は子どもがすべき?」。発表会に向けた本格的なグループワークを開始。

⑨ 3月1日・日

発表に向けたグループ作業①

自分にとっての「あっち」と「こっち」を紙に書き出して、歩きながら声に出してみる。グループワーク。

⑩ 3月7日・土

発表に向けたグループ作業②

自分たちのシーンについて、議論も白熱。「オープニングダンス」と「エンディング(ダンス)」の練習も開始!

⑪ 3月8日・日

発表に向けたグループ作業③

グループ作業。話し合いに練習に大忙し!その後、進行役が本番の構成案(これまでのワークショップでみんなが発表したものからの提案)を発表。少しだけ通してみる。

⑫ 3月14日・土

初めての通し稽古

再構成した本番の構成を、進行役が改めて発表。担当する場面も再確認。話し合い、つくり直し、練習にいそむ。順番を確認しながら、頭から終わりまでざっくり通してみる。



⑬ 3月15日・日

劇の構成ごとに動きの練習

「オープニングダンス」「あちはこっち こっちはあっち」「エンディング」など、動きの練習。グループワークをしてから、頭から流れの確認。衣装合わせ。

⑭ 3月21日・土/祝

リハーサル

テクニカルリハーサル。初めて舞台上で練習!

⑮ 3月22日・日

本番!

午前、ドレスリハーサル。
午後、本番。
終了後に打ち上げ。

座談会

自分の中からうまれる演劇

「介助・介護」をテーマにして行われた「地域の物語」の2年間。

参加者の多くは、介助・介護の経験がある人たち。

その切実な体験を語るの、やはりチャレンジだったそうです。

参加者のお三方に、振り返っていただきました。

参加したきっかけ

——まず、参加されたきっかけを教えてください。

のりびー…自分の「粹」を外したい。その気持ちが湧き起こってきたときに、最も自分にできそうにないことが「演劇」だったんです。どうして舞台の上で恥ずかしげもなく演技できるのか謎で、遠い存在だった。だけど、そこに何が隠れてるんだろうと気になって。知り合いが「地域の物語」に参加したと聞いていたので、縁を感じて、思い切って2年目に申し込んだんです。

ようこ…私はまず（花崎）攝さんの



のりびー

別のワークショップに出たんです。それが面白くて、応募したのが最初です。やってみると、みんなでコミュニケーションを取りながらつくりあげていくことに価値があると感じて。それで2年連続で申し込みました。

やまちゃん…私は砧公園を散歩してたら、掲示板にね、これのチラシが出てたんですよ。でも私もう75歳ですよ。取ってくれるのかしら？って思いながら応募しました。そしたらお情けで……（笑）。2年間、お勉強させてもらいましたわ、若い人から。こんな世界もあるんだなあって。迷ったこともあるけど、楽しかった♥

のりびー…正直、思ってた演劇のイメージと違いました。もっと発声練習とかするものだと思ってたから。**やまちゃん**…普通のお芝居みたいに、脚本があるわけでもないしね。

のりびー…自分の話をここまで赤裸々に出すという覚悟もなく。でも自分を変えたいという思いがツナギとめてくれて、やりましたね。袖で待ってる時もワクワクで、舞台に立ってるあいだは夢のようでした。みんなでつくりあげるパワーって、こういうことなのかと。

ようこ…だけどこれは本当に演劇だなんて思いますね。自分の頭の中だけであだこうだ組み立てると、



ようこ

身体で表現することは全然違う。**のりびー**…話を聞いて理解することもあるけど、身体を通してわかることも多い。それに素人だからこそ、直接、心がバンって出るのかもしれないですね。

——プロセスはどうでしたか？

ようこ…私はこう思う、こう感じた、何でも言って構わない場ですね。互いを受け止めていくことで、その信頼によって思わぬ方向に導かれていく感じがおもしろい。

のりびー…自分も一員だって思うようになってから、楽しくなりました。知らない者同士だから時間はかかるけれど。

ようこ…グループで作業を進めている時は、進行役の人たちからは「そ

れでいいの？ もっと面白くなるんじゃない？」ってずっと問われていた感じでした。

のりびー…もうちょっと進行役の人たちが介入してくれるのかと思いきや、ほとんど話を聞いているだけ、っていうスタンスに最初は驚きました。でもあとで聞いたら、「このグループはメンバーだけで解決できる」と見ていてくれたようです。

様々な反応

——2年目は「世田谷パブリックシアター中学生演劇部 批評課」の子たちが舞台を観に来ましたね。彼らなりに咀嚼して、何人かにインタビューも試みて、印象深かったシーンを再現してみたり、介護・介助のことを彼らなりに考えたりした結果、最後は「地域の物語」へのレスポンスとして、中学生自身がつくった作品を皆さんの前で発表しましたよね。**やまちゃん**…やっぱり見る目が違うなって。若い子たちだからね。

ようこ…励ましてもらってる感じがしました。優しいわねえ、あの子たち。私がインタビューで喋ったことに対しても返してくれた感じがした。**やまちゃん**…やっぱりね、考えが伝わってたと思う。介護とかに関して

——特にしらさんの、統合失調症に



やまちゃん

なり、最後は癌で亡くなった妹さんに向けて言った「はるこ、俺たちはよくやったね」のせりふは、中学生たちに強い印象をもたらしたようです。

ようこ…ほんと私は私、すごく迷ったの。あの「よくやったね」というせりふが、観客の人たちにどう受け止められるかにびびったの。

やまちゃん…話し合いの時に、「そこまで言っちゃっていいの？」ってなったね。

ようこ…内容もとてもプライベートなことだったし、「ご高齢のお母さんにはちゃんと言ったの？」って、何度もしらには訊きました。だけど結局は、受け取る人にも何かが伝わるという奇跡的なことが起きた。

のりびー…私は自分の体験に重ねて、「よくやった」ということを自分自身についても認めようと思ったんです。しらさんも、ずっと自分に言えなかったせりふなんでしょうね。

ようこ…しらは、後でお母さんに「ありがとう」って言われたんだって。**のりびー**…ほんと？ そうか、しらの中でも親に来てもらうのはチャレンジだったのかもね。

ようこ…家族にとっては秘密のことだから……。あえて舞台で言うことで、別の世界に放ったのかも。劇場でまったく知らない人に観てもらうことで、受け手の人たちとのあいだで完成できるものがあったと思う。

「地域の物語」を通して

——今回の経験を通して、変化したことはありますか？

のりびー…自分の中で決めた一線というか、ここから先は自分の器では苦しいっていうセンサーが敏感になりました。そしたら気持ちが楽になって、罪悪感も感じなくなった。自分の軸ができると周囲の雰囲気も変わる感じがしますね。

やまちゃん…私は自分なりにやってきたことが、それでよかったんだな、と思えるようになりましたね。

ようこ…私は仕事仲間や家族に「ど

う思う？」って訊くようになりました。そうすると相手も喋るんだなってことに気がついた。ワークショップでも、相手に訊くことで場がつけられていったなって思う。今までは「私はこうしたいんだけど！」って乱暴に言っちゃってただけ。

のりびー…言える人がうらやましい！ 私は逆に、もっと周囲に自分の意見を言おうと思うようになりました。気持ちって言わなきゃわからないんだ、そして自分の想像とは違う反応が返ってくるものなんだって気づいたんですよ。そしたら今までは敵みだった関係でも、応援者になんて変わったりもして。やっぱり思ってることを丁寧に説明するのは大事なんですね。

——最後に「地域の物語」のおすすめポイントをぜひ。

ようこ…悔しかったり、悲しかったりすることが澱のように溜まっていて、口いっぱいになっちゃう時がありますよね。そこに演劇だと触れやすいのかなって思う。演じて、自分以外のものになるときにこそ、自分が出る。

やまちゃん…ふだん自分の殻に閉じ籠もっていて、誰かに言いたいと思うことが、ここでは発散できます。自分だけでなく他の人と集まってつくれるし。自分の思ったことをそのまま表現できる。与えられた台本のせりふを言うのではなくて、自分の中から生まれるものだから。

のりびー…多様なメンバーが集まることで、自分の違う面も発見できる。もちろんイヤな面も見えてしまうかもしれないけど（笑）、一歩踏み出すことで新たな自分に出会えますね。身体を通してわかることも多いから時間はかかるけど。

ようこ…すごく丁寧にものを築きあげていく関係だからね。誰かが上から指示するわけじゃなくて、みんなに選択肢がちゃんとあるのがすごいなって思います。みんなで考える、そしてやってみる。自分たちでつくりあげていく感じがあるんです。■

あなたへの物見遊山

小川智紀（NPO 法人 ST スポット横浜 理事長）



世田谷パブリックシアターの参加型演劇企画「地域の物語」では、他愛もない話を交わしている人たちが暮らす現在のまちのこと、つまり私たち自身を物語にし続けている。私がこの舞台に魅力を感じるのは、現状の社会を変えるかもしれない演劇の魅力が隠されているからだ。2015年の『あっちはこっち、こっちはあっち』では、介助・介護がテーマだった。作中のいくつかの場面を挙げたい。

序盤で舞台上上がったのは、ケアとサポートをめぐる問題だ。「ポテトチップスを食べる行為には指を舐める行為も含まれるか」として、介助者の指についたポテチの塩を舐めたい被介助者の思いに応えられるか、舞台上の人たちが右往左往して話しあうシーンがあった。そのとき出演者は、これは「なんちゃってディベート」だと宣言して議論をするのだ。議論の勝敗や結論には興味が行かず、被介助者か介助者か一方の立場に立つことのむずかしさが、自分に染みしてきた。

福祉分野に限らず、教育や、芸術文化の仕事でも対人サービスの現場では「当事者は誰なのか」との問いをめぐって議論が尽きない。このあたりのモヤモヤと、対立する双方の立場を一瞬で往還できる演劇の面白さが滑らかにつながっていた。

失禁と排泄介助をめぐる悩みが語られるシーンも印象深い。告白できない男性が持つ、漏らすこと自体を恥と捉える思いと、それに気づかず「オムツでそのままし

おがわ・とものり／NPO法人STスポット横浜 理事長。世田谷パブリックシアター夜間電話番号を経て、2004年よりSTスポット横浜で地域連携事業の企画制作に従事。現在は、地域の民間団体の文化活動をサポートするヨコハマアートサイト、学校とアートの現場をつなぐ横浜市芸術文化教育プラットフォームを担当。

ちゃってくださいよ」と声をかけ後悔した介助者の場面だ。被介助者に失禁は恥ではないと意識変革を迫ることの是非や、介助者の効果的な経験蓄積のあり方に私の考えは向かない。まずドキッとすると。そして、そうだよなあと思しめるばかりだ。

恥という語りにくい、語りようのない事態について、人物の後ろにある膨大な背景を、自分たちの身体を使って焦点化するのだ。出演者たちが身体全体を使い演じることで、私は思い出す。複雑なものを複雑なまま伝えることが、演劇にはできるのだと。

「地域の物語」は社会課題を考える演劇だ、と肩に力を入れる必要はない。むしろ、演劇の王道である物見遊山だと思う方が身体に届いて、舞台がくっきりと捉えられる。興味本位で舞台に向けた視線がいつの間にか客席の自分に帰ってきて、舞台と客席の境界はついに見定めが効かなくなる。

私はこの舞台を見て、劇場にある公共性について再考した。教科書はpublicのことを「open / official / common」と説明するが、どうにもうまく当てはまらない。openと呼べるほどのキャパシティがない空間で、officialというよりもっと感覚的な話が、commonの前提にあるはずの共通の利害が調整されないまま、地域の物語が生まれていく。そんな半公共空間が、世田谷パブリックシアターには息づいている。

すばらしい“普通”のみんな

今村舞（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

いまむら・まい／「地域の物語2015」「地域の物語アーカイブプロジェクト2014-2015」にインターンとして参加。筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程在籍。専門は社会教育と人権。人々が自分の権利を回復する過程としての演劇について研究中。

ブラジルの教育者パウロ・フレイレは、「一見すると沈黙している人々は、決して語るべき言葉を持っていないのではなく、語る機会と権利を奪われているだけだ」とした。この、「すべての人々が語るべき言葉をすでに持っている」という現在の人権論の基本となる理念を、「地域の物語」は体現していた。

本編である「地域の物語2015ワークショップ」では、みんなが語る存在へと変化していった。経験を語り合い、質問し合うことで、今まで気にとめなかった自分の経験の価値に気がついていく。言葉の背景を見つめることで、言葉が自分のものになっていく。そしてその言葉がみんなの言葉になっていく。語ることで、ひとり一人の経験がみんなの物語へとなっていった。

このワークショップの参加者は、ごく普通の人々、いわゆる市井の人々である。すごく苦労したと自負している人を募集しているわけでもなければ、これを足がかりに

有名になろうとしている人たちが集まるわけでもない。「介助・介護について考えた」と思った演劇が好きな地域の人たちだ。そんな普通の人々が、こんなにもたくさんの尊い物語を持っている。この事実は、本人たちだけでなく、その物語を観る私たちにも勇気を与える。「今の自分にはなにもなくても、いつかこんなすばらしい物語を持てるようになるのかもしれない」「今経験している毎日が、尊い物語になっていくのかもしれない」そう思えるようになることは、自分自身の価値に気づいていく過程なのだ。

「地域の物語」を通して、人々は、自分の語るべき物語と、それを持つ自分の尊さを確認することができる。自分の存在の価値を自覚できるこのワークショップは、まさに人権そのものの体現だった。

中学生が部活動のように参加できる「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」。その特別編として、『地域の物語』を観劇し、その体験をもとに作品／批評をつくりました。

進行役レポート

「地域の物語」への中学生からの返歌

藤原ちから（批評家・編集者/BricolaQ主宰）

ふじわら・ちから／世田谷パブリックシアター「キャロマガ」などを編集するほか、舞台芸術について様々な記事を執筆している。遊歩型ツアープロジェクト『演劇クエスト』を国内外の各地で展開。徳永京子との共著に『演劇最強論』があり、ウェブサイト「演劇最強論-ing」を共同運営中。
http://bricolaq.com/

2015年の春休みに、「世田谷パブリックシアター演劇部 批評課」を開催した。中学生を対象とした7日間のワークショップだ。周囲からは「中学生に批評？」とそのギャップに驚かれた。実際、批評には古めかしいイメージが付きまとう。歳をとった男が、眉間にしわ寄せて腕組みして観て、後日、難解な文章を書く、というような。確かにそれも批評の一形態だけど、それだけが全てじゃない。中学生に批評。いいじゃないか。

では批評とは何だろうか？ まずそこには「①ある作品に対する応答」という役割がある。何もないところに批評は生まれない。まず先行する創作活動があって、批評はそれを追走する。ところが批評にも創造性はある（文学作品としての価値を持つ批評もある）ので、これは一種の二次創作に近い。

批評のもうひとつの機能は「②ものごとの本

質を突くこと」だ。混沌としたイメージの海から、一筋の光をつかみとること。批評家はその急所を見極める目と、秘孔を突くための腕を日々磨いている。

さて、この2点を備えた上で、批評の範囲を拡張してみよう。例えば、文章で書く、という制約を外してみたらどうだろうか？ 韓国では、絵で描いたり、カカオトーク（LINEのようなもの）の会話で批評している例もある。①応答し、②本質を突くやり方はきっちもっと自由なのだ。だとしたら、ある演劇作品に演劇で応答する、という批評もアリなんじゃないか。

ちょうど春休みに入るか入らないかの時期に「地域の物語」の発表会があった。まずは中学生たちと一緒にその公演を観て、その体験を咀嚼し、あれこれ実験しながら、やがて中学生自身の演劇を立ち上げていくのはどうだろうか？ もうひとりの進行役である柏木陽さんや世田谷

パブリックシアター学芸のみなさんと話す中で、そういうワークショップの枠組みができあがっていった。以下、7日間をざっくり振り返ってみる。

1日目 「批評」のいろいろなパターンについて写真や映像を見ながら考えてみる。そして「地域の物語」を観劇。（宿題：観劇メモ）

2日目 古今東西の様々なテキストを、その文体を感じつついろんなやり方で読んでみる。（宿題：「地域の物語」感想文）

3日目 辞書で「介助・介護」という言葉から出発して、いろんな語彙をたどって旅してみる。その語彙を身体で表現してみる。（宿題：3つの語彙を使って文章をつくる）

4日目 インタビューの練習。そして実際に「地域の物語」メンバーにインタビュー。

5日目 インタビューで気になったトピックをもとに、シーンを再現したり新たににつくったりしてみる。

6日目 劇をつくって、こわして、またつくって、の繰り返し。それらのシーンを繋げていく。

7日目 ギリギリまで稽古。いざ、「地域の物語」メンバーの前で発表！

今思うと、春休みに宿題を出しまくるなんて可哀想なことをしたけれど、彼らはさして不平も言わず——つまり、少しは言った（笑）——実にユニークな回答を見せてくれた。柏木さんが中学生ひとりひとりの特性を見極め、その独創性を引き出そうと努めてくれたことが大きい。唯一の正解（そんなものはない）を高圧的に教えるというスタイルではなく、中学生たちがみずからの頭で考え、その都度の答えを出していくのを、彼は常に待っていた。ああ、こんな謎めいた「おっさん」（柏木さんの愛称）が、中学生くらいの頃に近くにいてくれたらよかったのにな、と思いながら、わたしは彼のやり方を横で見ていた。

ワークショップ最後の発表会は、「地域の物語」の公演から受け取ったギフトを、「返歌」としてお返しするような形になった。それは二次創作的なものだが、まぎれもなく中学生たち自身のものでもあった。ポテチに箸を使うかどうかというシーンの模倣では実際に意見を闘わせたし、ダンス的な動きも独自に編み出していた。①応答であり、②本質を突こうとしたという点で、これはやはり批評であったとわたしは思う。最終発表を観てくださった「地域の物語」のメンバーも、きっと中学生たちのこの「返歌」に何かを感じてくれたはずだと思っている。

そんなわけで、とても充実した7日間になった。でもちょっと盛り込みすぎたかな、と思わないでもない。「批評っていうのは愛と距離が大事なんだよ！」とかいろんなことを伝えてみたものの、果たしてどこまで彼らの血肉になったかな……。

そう思いつつ、およそ1年後。座談会（このあと掲載）に集まってくれた彼らの大人顔負けの言葉に、率直に言ってわたしは感動した。7日間の実験を通して、あるいはその後の1年のそれぞれの日々を通して（高校生になった子もいる）、彼らは、この世界のことについて、自分の言葉で咀嚼する力を身につけてようとしているのだ。

今は、不安定な世界である。これから何が起るのか、誰も答えを知らない。そんな時代を生きていくための力を、子供たちは育もうとしている。演劇や批評のやり方を使って。あるいは劇場という、様々な人々が集まる場所を使って。子供たちに残された時間はまだまだ長い。そして老い先短い大人にできることも、まだ少しはあるだろう。いつかまた「演劇部 批評課」、やってみたいです。

座談会

中学生が見た「地域の物語」

中学生たちは「介助・介護」のリアリティと、どのように向き合ったのでしょうか。
ワークショップに参加した中学生たちに、お話をしてもらいました。



かなん



なめ



はるか



まっちゃん



やまみ

「再現」に挑戦してみた

——「地域の物語」を観て、まずはどう感じた？

なめ…立ち見でしんどかったな(笑)。でも赤い糸を使ったシーンくらいから集中して、気にならなくなった。最後の、人が倒れるのを支えていくシーンも印象的だった。
やまみ…あのシーンでエビチリちゃんが可愛いって思ったの(笑)。

なめ…やっぱポイントはポテチの議論(ポテチを介助・介護の現場でどう食べさせるかという議論が「地域の物語」の作品内にあった)じゃない？ 実際にお箸で食べてみようってことになって、ワークショップの昼休みに頑張って食べたよね。
はるか…私、途中まで箸で食べたんだけど、めんどくさくて結局手で……(笑)。

(話があればこれや飛び乱れる)
まっちゃん…や、ちょっと論点を戻そう！ ワークショップはめっちゃ頭、使ったなあ。
かなん…しかも毎日宿題がある！
やまみ…就寝時間が21時半で、6

時半に起きる日々……。

なめ…早寝だね！ 人は22時から2時のあいだに寝ればいいんだよ。

はるか…女性ホルモンが出るんだって。

一同…へえー(感嘆)

なめ…えーと、また話が(笑)。もっかい戻ろう。

かなん…今までのワークショップと違うのは「再現」(観劇した「地域の物語」のシーンを自分たちでもやってみる)があったことかな。実際に舞台を観てるし、さらにインタビューもしたから、適当なことやれないなって思ってた。

まっちゃん…元の形を変えて、自分たちの形にしていっていい。

はるか…その過程が難しかった。このシーンを再現したいけど、ちゃんと覚えてなかったり。

なめ…語尾とか細かいことはいいかになって思ったけど、人前で初めて泣いた話とか、大事なエピソードは残したかったな。

はるか…心の声っていうか。感情が入ってて、でもひと言に凝縮された言葉は、スジが通ってる。そこは変

えちゃいけないと思った。それが欠けたら再現じゃなくなっちゃう。

かなん…うん、時系列とかは関係ないけど、その人自身の言葉は大事にしたよね。

なめ…再現して、しかも実際にやってた人に見せるから、責任が重かったなあ。

はるか…自分たちだけでつくるのとは違うからね。

やまみ…批評って難しいなあ。

はるか…や、普通の批評家はこんなふうに劇にしないとと思うよ(笑)。

なめ…パブリックシアターと(ワークショップ会場の)小学校のあいだを移動する時間も楽しかったな。歩きながら話し合ったりして。

出演者へのインタビューに挑戦

——「地域の物語」に参加していた、しらさん、ようこさん、エビチリちゃんに来てもらってグループごとにインタビューしましたね。
やまみ…あたし、結構マジメに「なんでそんな可愛いんですか？」って

エビチリちゃんに訊こうとした(笑)。あと子どもの頃、観ていたお芝居の最中に役者さんが死んじゃったっていう話、衝撃だった。でも事前に用意してた質問、インタビューの序盤で使い切ってパニックちゃって。

かなん…わかるー。

なめ…私のグループは「そもそもようこさんって誰？」っていうところから(ようこさんは2015年の「地域の物語」には出演していなかったが、しらさんのシーンづくりに大きく関与していた。p.16～p.17の座談会を参照)。介助・介護関係の仕事をしてる人で、いろいろあってドヤ街に……だったけ？

かなん…難しかったですね。腹の底が見えない感じで……。「あんたたち、かかってきなさいよ」みたいな凄みを感じた。でも、そうやって自分の話をする時は楽しそうじゃなかったけど、しらさんのことは大好きなんだなって。

まっちゃん…私は何を訊いたんだっけ？ しらさんの目しか覚えてない……。

なめ…私も精神を保つのに精一杯で、蛇に脱まれた蛙のようだった。

まっちゃん…でもしらさん、意外と面白い人だったよ。

「介助・介護」を考える

——テーマだった「介助・介護」に関しては、ワークショップの後、何か考えることはあった？

なめ…学校で忘れ物とかした時に「認知症じゃねえの」とか冗談でも言う人が許せなくなった。……認知症だったおばあちゃんが死んじゃったんです。その前の日に会いに行つて、何もごはん食べられなくて、目だけ動かせる状態で。おばあちゃん、私が幼稚園くらいの時に私と知能が逆転して、むしろ仲良くなったんですよ。朝一緒に起きて勝手にゼリー食べてお母さんに怒られたりとか。だから介助する人とされる人が友達

になっていいのか悪いのかって話があったけど、ダメってことはないんじゃないかな。

はるか…認知症の人はそれをやりたくてやってるわけじゃなくて、心細さが出てるんだよねって話を母と姉としたの。母は介護施設で働いてるんだけど、介護施設でも、お気に入り介護の人がいないとすねちゃって部屋に引き籠もるとか。記憶があってもなくても寂しいのは変わらないんだよね。だったら、そっけない態度をとるよりは、家族みたいに接しての方がいいんじゃないかなって思う。

かなん…今「される側」の話してたじゃん？ でも「地域の物語」は介護・介助を「する」側の話だったよね。ようこさんたちの苦しみをわかってあげることではできないけど、聞くことだけ是可以じゃない？ いちばんしちやいけくないのは「私には関係ない」って他人事にしちゃうことかなと今、思ってる。

なめ…介護・介助の大変さって、正直わからないし。

はるか…リアリティがないからね。
まっちゃん…でも「する」側のほうが、きっと先に回ってくるよ。

やまみ…今日、これから大阪に行つておじいちゃんに会うんだけど、たぶん実際に介護することになると思う。

なめ…当事者にならないとわからないのかな。

かなん…当事者じゃないからこそ、冷静に考えられるんじゃない？

はるか…こういう話を聞いてると、身近に思えてきたりもするよね。少なくとも連想しやすくなる。

まっちゃん…ワークショップの前よりも、ニュースで見るひとつひとつの事件を怖いと思うようになった。親が施設に入った時に、そういう事件になっちゃうのかなとか。「地域の物語」の中で、トイレが間に合わなくて……という話があったけど、ああいう些細なことからはじめて、全国放送のニュースになっちゃった

りするんだらうなって。

なめ…「介護疲れ」もよく聞くよね。自殺したり殺しちゃったり。どうにかならないのかなあ。

はるか…家族や親族を施設に入れると一ヶ月に一回も会わない人もいるって。親が死んで泣いたりするけど、心の中では亡くなってよかったって思うこともあるのかな……。

やまみ…前に読んだ小説で、ちゃんと介護してる人よりその兄弟のほうが親の死に目ですごく泣いていて、介護している人はそんな兄弟を冷たく見て「なんで今さら泣いてんだ」と怒る、ってシーンがあったよ。

なめ…うちのお母さんは仕事もあるし、丸一日つぶれちゃう介護が無理なんだけど、それと同じで、その兄弟も、すぐに会いに行けなかった自分を責めて泣いた可能性もあるかも。

やまみ…うちの親戚は私の家族だけ東京にいるから、なかなか会いに行けないの。東京に来る時も「何かあったときに、後悔するかな」って親同士は相談したらしいんだけど……。
なめ…どこまでが妥協できるラインなんだろう。

まっちゃん…どこでも妥協はできないんじゃない？ 私は、私自身がいつか親を「お荷物」にしちゃうことが怖い。今はもちろんそんなつもりないけど、自分のやりたいことと親のこと、どっちを選ぶのかなって。
はるか…「介護疲れ」する人って、心のどこかで「お荷物」って思っちゃう自分に対するストレスが溜まってしまふんじゃないかな。

やまみ…お父さんやお母さんも、いつか自分がそうなるって思ってるのかもしれない。
まっちゃん…それ考えると怖いなあ……。

——率直な話をしてくれて嬉しいです。未来がどうなるかわからないけれど、演劇を通して世代を超えた対話ができるんだな、ということは感じました。今日は集まってくたさってありがとうございました。■

「地域の物語2014-2015」ワークショップで、舞台に盛り込めなかったエピソードを、舞台とは違うかたちで残そうと、「聞き書き」によって書き起こし、冊子にまとめました。

インターンレポート

聞き書きで深まる物語、続く関係性

今村舞（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

「地域の物語」の発表会に向けたワークショップでは、本当に多くの物語が語られる。でも舞台での時間は限られているから、そのほとんどは舞台にはのらない。みんなで泣いたあの話も、気に入っているのは私だけなのかもしれないささやかなあの話もありめなければいけない。しかたがないけど、とても悔しいことだ。

そこで、舞台にのせきれなかったみんなの物語を、聞き書きとして冊子にするためのアーカイブプロジェクトが生まれることになった。

ワークショップの1回目に、誰のどんな話を聞きたいか、自分がどんな話をしたいかをみんなで付箋に書いて、貼りだしてみた。並んだ付箋を眺めながら「そんな話もあったね」「この話が気になっていた人、私以外にもこんなにいたんだ」という驚きの声があがった。みんなの「聞きたい」と「話したい」が込められた付箋たちは、2014年、2015年の「地域の物語」ワークショップが凝縮されているようだった。

その後は話したい内容ごとに少人数のグループをつくり、聞き書きを進めた。聞き書きは、大切な経験を語ってくれている人の口調や感情をのがさないように、一所懸命に耳を傾けることから始まる。聞いてくれる人がいると思えるから、安心して語ることができるのだし、「自分もみんなの物語を聞きたい」と思える。以前

聞いた話も、はじめて聞く話も、どんどん深く広がっていった。「地域の物語」の中で、自分の物語を「話してくれる」「聞いてくれる」強い関係が築かれてきたことを実感した。

アフターワークショップの最終回は、自分の書いた聞き書きを読むささやかな発表会になった。同じ人から同じ話を聞いていたはずなのに、長さも書きぶりもまったく違う！ できあがった聞き書きには書く人の個性があふれていた。でもそんな一見バラバラの聞き書きの中にも、いくつもの共通する言葉があった。それらの言葉は、話してくれた人だけでなく、聞き書きをすることによって同じ物語を共有したみんなにとっての大切な言葉だ。

聞き書きは、話してくれる人とそれを聞いて書いてくれる人の両方がいないと成立しない。できあがった聞き書きの中には、話し手だけでなく、聞き手の思いが込められている。話し手と聞き手の関係性があるからこそ、舞台にのりきれなかった物語たちが生き返って、さらに豊かな物語になった。

「地域の物語」で生まれた関係性は、物語は続いていく。完成した聞き書きの冊子『あっちはこっち こっちはあっち 介助・介護をめぐる聞き書き集』は、その証拠なのだと思う。■

冊子『あっちはこっち こっちはあっち 介助・介護をめぐる聞き書き集』（地域の物語 アーカイブプロジェクト 2014-2015）より。この文章は、「語り手」ようこのお話を「聞き手／書き手」よしだが書き起こしたものです。



語り手＝ようこ

抱え込んだじゃう愚かさ

書き手＝よしだ

（……）母は平気で兄のことを人前で「この人は精神障害者です」って言うの。周りはなんとなくはわかっているから、そんなことははっきり言われるとほんと、ドン引き。引くよねー。私「本当にやめてください」って何度思ったことか。なんでみんながわかっていること、いちいち言わなくてもいいこと、なんでわざわざ言うんだらうって。でも言わずにはいられないのも感じてはいた。

兄は一七歳で学校に行けなくなったのね。電車に乗れなくなってさ。それがはじまりかな。

当時は医者が病名をつけたがらなかったし、兄も若かったからさ、ノイローゼとか、神経症とか曖昧なままでも病院を行ったり来たりして。それでも全然ダメで。

四年くらいしてから、統合失調症って診断がついたのね。だけどそんな兄に対して母も父も「私がなんとかしますから」って。私には「あなたは妹なのだから、静かにしててくださいね」って。それでも度々トラブルは起こってたからね。その度に両親が「何とかします」って言うんだけど、何にも変わらないのに、そう言って抱え込んだじゃう愚さがすごく嫌だし、怒ってた。うちの両親は多分、病識を持ちたくなかったの。（……）

母に対しては、兄のことを抱え込んで責任を持とうとした傲慢な所は許せんと思う。でも、愛があつてのことだし、それが母なりの家族だったんだらうなあとも思う。母はいつも本気の人だから、それが私にはわからないから羨ましくてすごいなってね。思うよ、今は。母にとって一番欲しかったのは娘じゃなくて女友達で、わからんちんでへんちょりん人だったけれど、友達としてはいい人だった。

兄には恩着せがましいけど、兄は自分だけでなく、家族の力で生きている。よく生きているなって、思う。これから、本当、何が起るかかわからないけど、何かが起こってしか何かしてくれないことに対して許せないとははっきり言えなくて、怒りは覚えるのだけれど、はっきりは言いたくない。許すとか、許さないとか。微妙な位置にいて塩梅を見て、自分ができる範囲をどこまでかは、はっきりさせておこうとは思うよね。

「地域の物語アーカイブプロジェクト2014-2015」をお読みにになりたい方は、
世田谷パブリックシアターホームページ ⇒ ワークショップ・レクチャーページ ⇒ アーカイブページ ⇒ 出版物
https://setagaya-pt.jp/workshop_lecture/about/archive/publication.html



援助とする人の判断に
応じて
援助すること

介助

援助される人の
意思・判断で
その人が実現したいこと
必要としていることを
援助してもらうこと

介護

地域の物語 2014

■ワークショップ「介助するひと、介助すること」

〔日程〕2014年1月12日(日)、13日(月・祝)、18日(土)、26日(日)、2月1日(土)、2日(日)、9日(日)、15日(土)、3月1日(土)、2日(日)、8日(土)、9日(日)、15日(土)、16日(日)、21日(金・祝)

〔時間〕13時～17時

〔進行役〕花崎攝(シアタープラクティショナー)、山田珠実(振付家・ダンサー)、

〔進行役アシスタント〕福原忠彦

〔対象〕介助をしている人、介助について学んでいる人、介助に携わったことのある人



■発表会『介助するひと、介助すること』

〔日程〕2014年3月22日(土)、23日(日)

〔時間〕15時～

〔会場〕シアター・トラム

〔出演〕板倉たかね、内田浩美、吉川桂子、小岩井真由美、斉藤みえこ、佐藤明子、里子真一、島田健司、土田悠、遠山左千子、富岡大策、中村恵理、西嶋一哉、船崎葉子、ポラン、松邑和敏、御原由美子、三宅弘朗、福原忠彦、山本恵子

〔進行役〕花崎攝(シアタープラクティショナー)、山田珠実(振付家・ダンサー)

〔進行役アシスタント〕福原忠彦

〔ご協力いただいた方々〕菅原和之さん、上田要さん、辻安光さん、矢崎与志子さん、石ヶ森光政さん、坂爪真吾さん

〔照明〕三谷恵子(デザイン)、上山真輝、武井由美子、阿部康子

〔音響〕遠藤瑤子(デザイン)、柴田未来

〔舞台〕斉木理恵子

〔舞台監督〕棚瀬巧

〔学芸〕恵志美奈子、九谷倫恵子、福西千砂都、田幡裕亮、荏澤大地

〔主催〕公益財団法人せたがや文化財団

〔企画制作〕世田谷パブリックシアター

〔後援〕世田谷区

〔協賛〕東レ株式会社

〔協力〕アサヒビール株式会社

平成25年度 文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

.....

〔シーンリスト〕1. オープニング 2. 参加動機 3. Yes/No「介助と介護」

4. 取材(上田さん／辻さん／矢崎さん) 5. 介助指導 6. 排泄が大事!

7. 排泄ダンス 8. 助けてっていいないこと 9. 訪問介護 10. 家族会議

11. Yes/No「介護」 12. グループホーム 13. 特別養護老人ホーム

14. Yes/No「自立」 15. 介助の仕事 16. 終わりの挨拶 17. エンディング

参加者の内訳(年代、性別)

20代 2名(男性1名、女性1名)

30代 3名(男性3名、女性0名)

40代 6名(男性3名、女性3名)

50代 7名(男性2名、女性5名)

70代 2名(男性0名、女性2名)

合計 21名(男性9名、女性11名)

職業(複数回答有)

福祉職

会社員

主婦

無職

劇団員

自営業

専門職

参加動機(複数回答有)

介助・介護への関心

演劇・創作活動への関心

その他

介助・介護の経験について(複数回答有)

仕事で介助・介護をしている、していた経験がある

家族を介助・介護している

家族を介護していた経験がある

家族に介護された経験がある

その他

ワークショップに参加して思ったこと

(どのような変化・発見があったか／演劇について思ったこと)

どんな人も舞台に立つ、演劇をする資格がある。それはその人の生きてきた身体の歴史があるから。既存の台本とは異なり、「地域の物語」のように自分の話、インタビューをもとにする作品ならば、市民参加であることが作品の芸術性に効果的に働くと思うし、だからこそやる価値がある。／演劇は、人と人が出会い、何かを考える方法だと思う。／前向きに自分で自分を〈癒す〉ことが自然とできた。演劇が持つ、素晴らしい〈力〉を強く実感した。これまで知っていた演劇の作り方(脚本家書いた台本通りに、役者がセリフを覚えて演じるもの)とは全く違った。今回のように市民の日常の感覚、経験を、身体と体を使って表現することで、立派に見応えのある演劇になるのだと知った。

*一部要約

地域の物語 2015

■ワークショップ「介助・介護をかんがえる」

〔日程〕2015年1月11日(日)、12日(月・祝)、24日(土)、31日(土)、2月7日(土)、8日(日)、21日(土)、28日(土)、3月1日(日)、7日(土)、8日(日)、14日(土)、15日(日)、21日(土・祝)

〔時間〕13～17時

〔進行役〕花崎攝(シアタープラクティショナー)、山田珠実(振付家・ダンサー)

〔進行役アシスタント〕山本雅幸



■発表会「あっちはこっち、こっちはあっち～介助・介護をかんがえる」

〔日程〕2015年3月22日(日)

〔時間〕15時～

〔会場〕シアタートラム

〔出演〕新井恵子、内田浩美、斉藤みえこ、佐川健之輔、佐藤明子、島田健司、白鳥義明、田上朋子、chako、中村恵理、中村恵、西澤法子、降矢幸子、ポラン、三宅弘朗、山本恵子、山本雅幸、吉田みずほ

〔WSプロセスのみ参加〕小岩井真由美、成島翼、船崎葉子、御原由美子、山口咲貴子

〔進行役〕花崎攝(シアタープラクティショナー)、山田珠実(振付家・ダンサー)

〔進行役アシスタント〕山本雅幸

〔照明〕三谷恵子(デザイン)、杉本公亮、飯泉淳、武井由美子

〔音響〕遠藤瑤子(デザイン)、阿部史彦

〔舞台〕斉木理恵子

〔舞台監督〕棚瀬巧

〔学芸〕恵志美奈子、福西千砂都

〔インターン〕今村舞



〔主催〕公益財団法人せたがや文化財団 〔企画制作〕世田谷パブリックシアター

〔後援〕世田谷区 〔協賛〕東レ株式会社 〔協力〕アサヒビール株式会社

平成26年度 文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

- 〔シーンリスト〕 1. ケンの口上 2. オープニングダンス 3. ともの歌
4. 食事介助ってどこまでやる? 5. なんちゃってディベート～ポテチ編
6. 今は笑える介護 7. おしもの話 8. あっちとこっち～タイトルの話
9. 家族と介護をめぐるモノローグ 10. なんちゃってディベート～家族介護編
11. ある民生委員の話 12. 僕がみたデイケアの現場
13. 介助の現場～エビチリ編 14. 距離についてのエクササイズ
15. ある家族の話 16. あっちはこっち 17. エンディング

参加者の内訳(年代、性別)

20代 4名(男性2名、女性2名)

30代 1名(男性0名、女性1名)

40代 6名(男性1名、女性5名)

50代 5名(男性1名、女性4名)

60代 3名(男性0名、女性3名)

70代 2名(男性0名、女性2名)

合計 21名(男性4名、女性17名)

職業(複数回答有)

福祉職 5名

無職 5名

アルバイト 4名

会社員 2名

主婦 2名

専門職 3名

自営業 1名

参加動機(複数回答有)

介助・介護への関心 7名

演劇・創作活動への関心 3名

その他 7名

介助・介護の経験について(複数回答有)

仕事で介助・介護をしている、していた経験がある 11名

家族を介助・介護をしている、していた経験がある 5名

家族に介護された経験がある 1名

その他 5名

ワークショップに参加して思ったこと

(どのような変化・発見があったか／演劇について思ったこと)

演劇はコミュニケーションツールになるのだと思う。特に何かを共有したり、作るという行為のなかでのツールとして、演劇は凄く面白い。／演劇は与えられた台本を覚えて演ずることではなく、もっと自分達の中に内包しているものを熟成させる時間なのだと感じた。／自己表現の場は怖いもので、演劇といえば「主役は美男美女で、舞台の上で大げさに演じてみるだけで疲れそうなもの」というイメージだったが、今回の演劇ワークショップでは、何も強制されず、値踏みもされなかった。一般の人の日常の感覚を尊重して演劇の素材として取り上げ、大事に扱い、主催者と参加者が文字通り共に考えながら作品に仕上げていく。こういう演劇のあり方が世の中にあることを、参加して初めて知った。

*一部要約

地域の物語2015 プレワークショップ 「介助や介護で困ること／心配なこと」

1月～3月の長期間にわたる「地域の物語2015」ワークショップの前に、気軽に参加できるプレワークショップを設定しました。2014年から2015年のテーマ「介助・介護を考える」を踏まえて、特に「困ること／心配なこと」を掘り下げました。

【日程】2014年11月8日(土)、29日(土)、12月6日(土)、13日(土)
【時間】13時～17時 【進行役】花崎攝、山田珠実 【進行役アシスタント】山本雅幸
【対象】介助・介護やケアの経験のある人、考えたい人

参加者の内訳(年代、性別)

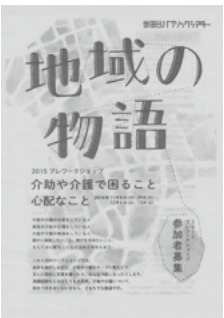
20代 **3**名(男性1名、女性2名)
30代 **1**名(男性1名、女性0名)
40代 **4**名(男性1名、女性3名)
50代 **4**名(男性1名、女性3名)
60代 **1**名(男性0名、女性1名)
70代 **2**名(男性0名、女性2名)
合計 **21**名(男性4名、女性17名)

世田谷パブリックシアター演劇部 批評課 からだで「みる、かく、かんがえる」

年間を通じて、中学生が部活動のように参加できる「世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部」。その特別編として春休みに、中学生が新しい形で批評を実践するプログラムを企画。同時期に発表会のあった『地域の物語2015』を批評対象にしました。

【日程】2015年3月22日(日)、26日(木)、27日(金)、4月1日(水)、2日(木)、3日(金)、4日(土)
【時間】10時～16時(22日のみ、17時まで)
【進行役】藤原ちから、柏木陽 【進行役アシスタント】落雅季子
【対象】中学1～3年生

参加者 **18**名(男性5名、女性13名)



舞台芸術のクリティック18《後期》 批評を書く2

「舞台芸術のクリティック」は、演劇やダンスなどの批評を実践していくレクチャーです。受講者は舞台を読み解く方法を学びながら、世田谷パブリックシアターの主催公演等を観て、批評を書くを試みます。2015年の対象公演のひとつが『地域の物語2015』で、提出された批評をもとにし、ディスカッションを行いました。

【講評日】2015年3月28日(土)
【時間】14時～17時 対象公演『地域の物語2015』
【講師】八角聡仁、森山直人
【対象】一般

参加者 **16**名(男性15名、女性1名)



地域の物語アーカイブプロジェクト2014-2015 「あっちはこっち こっちはあっち」

「地域の物語2014-2015」の参加者のうち、希望者が集まって、本編のワークショップでは掘り下げるのできなかったエピソードを改めて聞き合い、聞いたことを「聞き書き」として書き起こし、冊子をつくりました。

【日程】2015年7月11日(土)、7月28日(火)、8月7日(金)、8月17日(月)、9月10日(木)、9月12日(土)、9月13日(日)、26日(土)
【進行役】花崎攝、山田珠実 【進行役アシスタント】山本雅幸
【対象】「地域の物語」2014／2015 参加者からの希望者

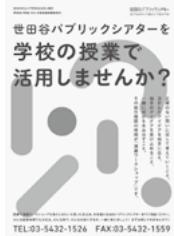
参加者の内訳(年代、性別)

20代 **1**名(男性0名、女性1名)
40代 **2**名(男性1名、女性1名)
50代 **5**名(男性0名、女性5名)
70代 **1**名(男性0名、女性1名)
合計 **9**名(男性1名、女性8名)





近日開催予定の主なイベント・ワークショップ



先生のためのプログラム2016

『教科書がゴキゲンになるワークショップ』

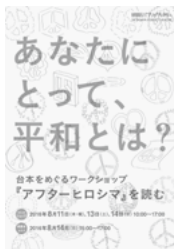
日程…2016年8月1日(月)10時～17時

対象…幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校などの先生

参加費…1000円 ※世田谷区立の小中学校の先生は無料

会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

教科の学びに演劇や演劇ワークショップを活かす方法を、教科書の単元に沿って、具体的に考えていきます。2学期に向けて、教科書の内容を楽しく、ゴキゲンに、学びましょう！



リーディング劇『アフターヒロシマ』発表会+トーク

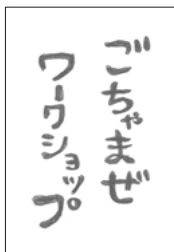
日程…2016年8月14日(日)15時～17時

対象…どなたでも

参加費…入場無料 要予約

会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

ロンドンの地域住民・コミュニティシアターが広島への原爆投下を出発点に立ち上げた台本『アフターヒロシマ』を一般の参加者が読む、リーディング劇の発表会+トークを行います。



『ごちゃまぜワークショップ』

日程…2016年8月30日(火)、31日(水)10時30分～16時

対象…小学生～20歳

参加費…1000円(全2回)

会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

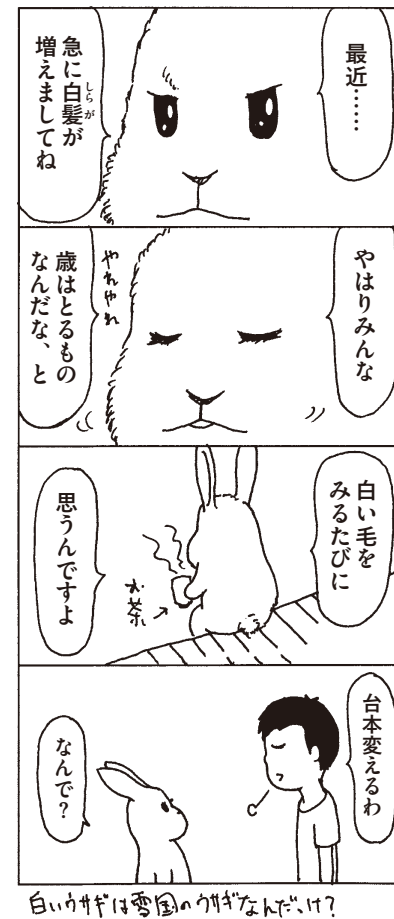
夏休み最後の2日間、宿題を早めに終わらせて、世田谷パブリックシアターに集まろう！学校も学年もごちゃまぜにして、みんなで演劇つくります！

学芸スタッフから

★まだ6月なのに、かんかん照りで太陽がまぶしい毎日です。今こんなに暑かったら、この先一体どうなってしまうのか、と不安になります。少しずつ薄着になるのもどこかで限界がくるので、今年の夏は、暑さをしのぐ日本古来の工夫を試してみます。打ち水、すだれ、氷嚢、ござ、風鈴…準備万端。真夏がやってくるのが楽しみです。[くに]

★今年の目標のひとつは「小さな遅刻をしない」こと。大きな遅刻は、私の力ではどうにもならない何かが理由だったりしますが、小さな遅刻は主に私の油断が原因です。しかし今年も半分が過ぎようとしている今、勝率は五分…このごく短い文章の締切もとうに過ぎてしまいました。ごめんなさい。あと半年で、巻き返したいところです。[ふく]

たまにはこんな役 #9



白いうさぎは雪国のおかたなんだ、け？

編集後記

日本の演劇は長いあいだ「観る」ものでした。ごくかぎられた、訓練を受けた俳優たちだけが舞台上に立つことを許され、「ふつうの人」はすでに完成された作品を、お金を払って観ることでしか演劇と関わられませんでした。確かにプロの俳優たちが上演する素晴らしい舞台を「観る」ことは、人生を豊かにします。今後もこの観劇文化は生き続けるでしょう。

けれど、今や演劇は「やる」ものにもなりつつあります。ワークショップで即興で何かを演じてみたり、朗読してみたり、踊ってみたり。それらを通して、スッと身体が動くようになったり、日常のものの見え方が変わったり、生き方が変わったり……。「やる」演劇にはいろんな未知の可能性があります。

世田谷パブリックシアターのワークショップは、基本的に、演技指導の場ではありません。演劇的な発想を通して、今の世の中のできごとや生活の中で感じるモヤモヤについて共に考え、何かを一緒につくっていく場です。特に今回ご紹介した「地域の物語」は、毎年積み重ねられてきたこともあり、共に考えてつくる場として、すごく成熟しつつあるのを感じています。

演劇、そして劇場は、きっとこれから全国的にもっとひらかれたものになっていくと予想されます。劇作家シェイクスピアが語ったように、「人は皆、役者」になりつつあるのです。とはいえ「やる」演劇が文化として根付いていくためには、劇場スタッフ、進行役、そして参加する地域の人たちの理解が不可欠です。「地域の物語」が培ってきた思想と技術は、きっとその未来に向けて、大いに参考になるはずです。[ちから]

[キャロマガ]

Vol.9 / Jul.2016

発行日

2016年7月30日

発行

公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
http://setagaya-pt.jp

編集

大谷薫子(本のモ・クシュラ株式会社)
藤原ちから、落雅季子(BricolaQ編集部)

企画

恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

デザイン

株式会社ウチカワデザイン

印刷・製本

株式会社リヒトプランニング

協賛

『TORAY』 東レ株式会社

後援

世田谷区

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財)せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター（約600席）、シアタートラム（約200席）の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター（主劇場）



シアタートラム（小劇場）

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階
 Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559
<http://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。